

- 92 団栗のぐりぐり廻る洗濯機 後閑達雄 (『母の手』)
- 91 ながれぼしそれをながびかせることば 福田若之 (『自生地』)
- 90 草の花散り敷くといふことのあり 石田郷子 (『椋』73号)
- 89 あをぞらの途中に烏瓜ふたつ 樫末知子 (『カムイ』)
- 88 山夕立指そよがせて開き入りぬ 中村草田男
- 87 ほととぎすすでに遺児めく二人子よ 石田波郷 (『惜命』)
- 86 金雀枝や基督に抱かると思へ 石田波郷 (『雨覆』)
- 85 木洩日のいちめんに蟻見えてきし 石田郷子 (『椋』71号)
- 84 花も亦月を照らしてをりにけり 今井肖子 (『花もまた』)
- 83 影のあるひとりひとりや桜の夜 下坂速穂 (『なんぢや』36号)
- 82 つかみたる雛に芯のありて春 正木ゆう子 (『羽羽』)
- 81 ちらちらと陽炎立ちぬ猫の塚 夏目漱石
- 80 御僧や雪解の風のごとく過ぎ 石田郷子 (『草の王』)
- 79 冬萌やいつも誰かが開くる窓 小関菜都子 (ブログ「週刊俳句」508号)
- 78 初鶏の真白にをりし四五羽かな 石田いづみ (『白コスモス』)
- 77 祝はれてをり凍草の王のごと 石田郷子 (『椋』68号)
- 76 ねむるため身をはたらかす十二月 田中裕明 (『夜の客人』)
- 75 明日行かな深志の城は雲晴れて飛弾の山なみ白くあれかし (松本城)  
みどかやと (『国立小曲』)
- 74 雪折れのままに雪へと沈みたる 小関菜都子 (『角川』11月号)
- 73 鳥が葉を落としてゆけり秋の山 対中いづみ (『巣箱』以後)
- 72 穴惑亡き人に弟子入志願 田中裕明 (『夜の客人』)
- 71 頭上来的鳶悪相ぞ秋の風 谷地由紀子 (『新しく』)
- 70 桔梗の映りて黒き公用車 石田郷子 (『俳句』2016年9月号)
- 69 秋いまだ大緑蓑と申すべく 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 68 黒揚羽ときをり影と入れ替り 上田りん (『類杖』)
- 67 文くれて草かげろふのごとく病む (『夜の客人』)
- 66 龍あるく青水無月の原濡れて 田中裕明 (『夜の客人』)
- 65 蓮を見る詩人のまるき食卓よ 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 64 口笛や沈む木に蝌蚪のりてみし 田中裕明 (『山信』)
- 63 一人だけ子を連れてゆく麦の秋 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 62 昔より竹林夏の一返信 田中裕明 (『花間一壺』)
- 61 さびしいぞ八十八夜の踏切は 田中裕明 (『夜の客人』)
- 60 けがの子をはげましてある櫻かな 田中裕明 (『夜の客人』)
- 59 この世でもつとも小さき花に涅槃西風 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 58 この地球よりチューリップの芽が大事 田中裕明 (『先生から手紙』)
- 57 春の雪波の如くに塀をこゆ 高野素十
- 56 浅春の岸辺は龍の匂ひせる 対中いづみ
- 55 小さき葉もちさきつらゝや皆つらゝ 高木晴子
- 54 何の芽か早や元日の土を割る 村上綱彦
- 53 まづ片目より鼻の眠くなる 山田弘子
- 52 扉のひらくたびに白雲十二月 友岡子郷 (『日の径』)
- 51 短日の羽虫あつまる小菊かな 田中幸音 (『花風』)
- ⑤ふたつづつ菌のならび冬に入る 田中裕明 (『夜の客人』)
- ④秋草の猛々しさを諾へり 石田郷子 (『木の名前』)
- ④さびしいからこほろぎはまたはじめから 清水径子 (『清水径子全句集』)
- ④塩振つて飯かがやきぬ十三夜 石田郷子 (『草の王』)
- ④どんぐりを拾つて振つて捨てにけり 矢野玲奈 (『森をはなれて』)
- ④露なめて白猫いよよ白くなる 能村登四郎 (『易水』)
- ④玄関を大きくあけて盆用意 小林すみれ (『星のなまへ』)
- ④③眼球に触れたる鳥揚羽かな 藤井あかり (『封緘』)
- ④②空蟬をもとのとこに戻せざる 藤井あかり (『封緘』)
- ④①指先の蟻大空を感じみる 村上綱彦 (『遅日の岸』)
- ④①日本は水に浮く國梅雨に入る 田中裕明 (『先生から手紙』)
- ④①風鈴をつるすこはい処にだけ 冬野虹 (『冬野虹作品集Ⅰ・雪子報』)
- ④③粽解く葎の葉ずれの音させて 長谷川權
- ④③蝶々の頭下げつつ向ひ風 岸本尚毅 (『小』)
- ④③蹴ちらして落花とあがる雀かな 川端茅舎 (『川端茅舎句集』)
- ④③石踏みて汐のにじみし干潟かな 深見けん二
- ④③雲に掻き傷竜天に登りしか ふけとしこ (『インコに肩を』)
- ④③鶉のむかう向きなる梅の花 星野立子
- ④②日當りて花新しき椿かな 清崎敏郎 (『東葛飾』)
- ④①大寒や転びて諸手つく悲しさ 西東三鬼 (『夜の桃』)
- ④①十羽みて同じ黒瞳や初雀 友岡子郷
- ④①湯気立てて大勢とあるやうに居り 岡本眸 (『知己』)
- ④①冷たさの詰まつてをりし林檎かな 加藤喜代子 (『霜天』)
- ④①めぐりては水にをさまる百合鴉 石田郷子 (『木の名前』)
- ④①白鳥の降り来て強き波ひとつ 平井岳人
- ④①水澄むや背伸びしなくてよいひとと 岡村潤一
- ④①秋冷に啼ける仔牛に手を吸はず 鈴木牛後 (『暖色』)
- ④①椎拾ふ一掬の風手のひらに 川端茅舎 (『華嚴』)
- ④①秋草の揺れの移れる体かな 涼野海音 (『一番線』)
- ④①流れきものに触れゆく蜻蛉かな 石田郷子 (『椋』0号)
- ④①涼みな色違ふ避暑地かな 森田峠 (『避暑散歩』)
- ④①いつからの一匹なるや水馬 右城暮石 (『上下』)
- ④①捕虫網持たせておけば歩く子よ 後藤比奈夫 (『金泥』)
- ④①さみしきの押し寄せてくるゼリーかな 川島葵 (『草に花』)
- ④①尚深く流るゝ早苗ありにけり 岡田耿陽 (『ホトトギス雑詠選集』)
- ④①溝浚へすみて雀のおりてくる 榎本享 (『おはやう』)
- ④①亀の子のすつかり浮いてから泳ぐ 高田正子 (『花実』)
- ④①ぬかるみのあれば吸ひつく落花かな 岸本尚毅 (『健啖』)
- ④①のりだして子も花びらを受けにけり 高田正子 (『玩具』)
- ④①みづうみの鴨引くことのひそかなり 田中裕明 (『先生から手紙』)
- ④①鶉の声透る楓の雪雫 飯田龍太 (『春の道』)
- ④①鳥の糞浴びたる枯木かがやける 榮猿丸 (『点滅』)
- ④①雪吊や旅信を書くに水二滴 宇佐美魚目 (『天地存問』)
- ④①根雪と記し農作業日誌閉づ 鈴木牛後 (『根雪と記す』)
- ④①口開けて眼とづれば吸入器 岩田由美 (『花束』)
- ④①へろへろとワントンすするクリスマス 秋元不死男 (『瘡』)
- ④①鉋屑向かうへ払ふ小春かな 星野蘭 (『木の家』)
- ④①林檎割る何に醒めたる色ならむ 高柳克弘 (『未踏』)
- ④①日の丸の余白に秋の日のひかり 西原天気 (『けむり』)
- ④① 秋海棠といふ名も母に教まりし 石田郷子 (『秋の顔』)